世界は平和ではない。

江田島健児

世界の友人たち（その一）。

　あなたが知っているように、地球上には色々な国があり、多数の民族が住み、数え切れない程の宗教がある。
国には歴史があり政治がある。人種には文化がある。そして、宗教には教義がある。この地球上に住む全人類が幸福で平和に暮らせる日々が来るだろうか。とても考えられない。
　一九七四年から二回の渡米を経て通算三十五年以上アメリカに滞在している御蔭で、世界中の人々と接する機会があった。アヤトラ・ホメニーのイランから来たイラン人、サダム・フセインのイラクからきたイラク人、ノリエガ将軍の中米パナマから来たパナマ人、内戦のエルサルバドルからアメリカに逃れて来たエルサルバドル人、ベトナム戦争でアメリカに逃れて来たベトナム人、ネパールの内戦を避けてアメリカへやって来たネパール人、ミャンマーから移住してきたビルマ人など・・・・。彼らの話を聞くと、平和なんてこの世のものではないような気がしてくる。平和とは天国の話のように思える。
戦後生まれの日本人には無縁の、生きることが常に生と死の隣り合わせの国々からアメリカへやって来た私の知り合いたちの話を書いてみよう。
　イラクから来たジャリルは、第一次湾岸戦争が始まる前にサダム・フセインの独裁政治の圧制から逃れ、ヨーロッパからアメリカへ辿り着いた。イスラム教徒が殆んどのイラクなのに、そのイスラム教がシーア派、スンニ派、クルド族に分かれて対立していた。キリスト教を信仰しているジャリルの家族がイラクに住むことは、明日からの未来も希望もなかった。どうにか生活はできても、不満を口にすることはできない。いかなる国民も政治や世論を批判することができない。もし口をすべらせて“政治が悪い”などと洩らして警察の耳に入れば、五体満足で警察所を出てくることはできないのである。片足や片手、あるいは耳や鼻、口や体のどこかが不具となるほどの拷問や虐待を受けて帰ってくる。ある日、ヨルダンから遊びに来たジャリルの友達が歩きながら「この国はおかしいよ」、と言った言葉がどこから警察の耳に入ったのか、すぐに彼は警察へ連行され、数時間後に解放されてジャリルの前に戻って来た時には、友達の片足は二度と以前みたいには歩けないように虐待を受けていた。びっこになった友達がヨルダン行きのバスに乗ったのを確認してから数週間後、ジャリルはイラクを出国した。この頃のイラクはサダム・フセイン一家のために存在しているようなものだった。宗教はイスラム教でも、政治も経済もマスコミも全てのものがサダム・フセインのために存在していた。こういう独裁国家の国民は独裁者一家の使用人にすぎない。使用人が主人を批判することは、もちろんできない。使用人が自由にできるものは何もない、出来るとすれば家のなかの日々の生活の営みだけであろう。
　一九八〇年代の初め頃。テキサス州ボーモント市で、知り合いのタイ人に頼まれ新聞広告に掲載されていた格安の中古車を一緒に見に行った。電話で教えられた低所得者層が住む古くてみすぼらしいその家のドアをノックすると、ドアを開けたスカーフみたいなヒジャブを被った中近東系の女性が用心深く自分たち二人の容姿を確かめ、覗き込むようにドアから突き出した顔がさっと周囲の様子を窺った。我々二人の東洋人以外にはだれも外にいないことを確認すると、我々二人を家の中に招き入れ喋り始めた。その女性の後ろに隠れるように彼女の夫が立っていた。「私

達はイラン人です。決して嘘をつきません。私たちには仕事がありません。生活するために金が必要です。だから車を安くで売ります。どうか車を買ってください」、声は小さく生活に貧窮した姿は家の外に怯えている気配さえした。一九七九年の十一月に起こったイランアメリカ大使館人質事件は、アメリカ国民のイランに対する憎悪を否が応でも

煽った。この時、在米する多くのイラン人が自分の身を守る為に国籍を偽っていた。私は一人の日本人として、このイラン人に哀れさを感じた。この頃まだ海外渡航者が少ない日本で、海外に住む日本人が恐怖や身の危険を感じて異国に住むことはごく稀なことであった。

一九八〇年代の後半にパナマからアメリカに移住してきたモレノ兄弟を自分の店で雇ったことがある。一九九三年の終わり頃、二人とも十七才と十八才の高校生だった。マヌエル・ノリエガはノリエガ将軍と呼ばれ、一九八三年から一九八九年までパナマの国家元首。軍の最高司令官を兼任しパナマ共和国の独裁者でもあった。独裁者の国では、絶対に政権を批判することは許されない。政治家でも政敵として敗北したらどこの独裁国家でも抹殺されてしまうのが常だ。ノリエガ将軍は麻薬の不正浄化や在パナマ米軍兵士の殺害、大統領選挙不正などのためにアメリカ軍に捕らえられる。そのノリエガ将軍の話なった時、弟のハイミーが「『ノリエガは自分の政敵を捕まえ、裸にして拷問し、最期は政敵の一物を切り取り、切り取った一物を政敵の口の中に押し込んで殺した』とパナマの市民の間では言われていた」と言った。石油を産出したりする国の独裁者はガソリンを無料にしたり、税金を徴収しなかったり、生活必需品の砂糖や塩を無料で配布したりする独裁者もいるが、政権に対する批判、批評、そしてその恣意行為、行動をすることは絶対に許されないのである。

政敵で思い出したが、一九七〇年代のアフリカのウガンダにアミンという名の大統領がいた。このアミン大統領も独裁者だった。自分の政敵を捕らえて、最期は政敵をライオンのいる檻に放り込み、ライオンと戦わせ、結局ライオンの餌食としたのである。

一九八〇年代の中頃からアメリカのテキサス州ダラス周辺で仕事しているが、当時中米のエルサルバドルからやって来たエルサルバドル人が大勢いた。それ以前は貧しいメキシコ人が大量にアメリカに入り込んでいたが、この頃はメキシコ人に劣らないほどエルサルバドル人が目立った。現在一緒に仕事をしているエルサルバドル人のフィリップがアメリカへ来る前のエルサルバドルを語る。

「ヘイ・メン。あの頃は、アメリカが支援する政府軍とニカラグアと関係のある共産・ゲリラが戦い、それに極右勢力のテロが入り混じり、エルサルバドルは毎日戦場だった。お互いに相手を焼き尽くそうと、山にも家にも火を付けるから、あちこちで火事ばっかりさ。それにだれも責任を取らないから文句も言えなかった。あの頃一番怖かったことは、極右勢力や共産・ゲリラが男児を人攫いに来ることだった。奴らは人家や村を襲い、男の子を年齢も構わず兵士として育てるために強引に引き連れて行った。自分の村がゲリラに襲われた時、自分は咄嗟に箱の中に隠れたから助かったけど、他の友達は皆ゲリラに連れていかれたよ。そして、行きたくなくてゲリラに抵抗した者は銃で撃たれてお仕舞いさ。そうでなくても地雷で片足を失くした者もいるし、住む所が無くなった者も沢山いたよ。だから、着の身着のままでアメリカへ逃げてきたんだ」

それでもフィリップは、「いつかは自分の国（エルサルバドル）へ帰りたい」と、言う。

世界の友人たち（その二）。

　一年半ほど前に一緒に仕事をしたスーザンは、ネパールからアメリカへ留学していた。スマートフォンもコンピューターも、だれにも負けないほど熟達している。頭の回転もすごく速い。もちろん英語も自分とは比べものにならないほど精通している。その彼女の表情のどこかに憂いがあった。学校を卒業しても自分の国には帰りたくない、と言う。学校を卒業したらアメリカで仕事をしたい、それが彼女の希望でもあった。
　「貴女みたいに頭が良くて、アメリカの大学を卒業したら、貴女の国ではすぐに良い仕事が見つかるでしょう」、当然のように彼女に言葉を向けると、「仕事はあるかも知れないけど、今自分の国は政治と民族主義、それに共産主義が入り乱れて、治安がすごく悪いのよ。先日も大学教授が共産主義を批判したら、次の日だれかが教授の首を切り落とし、その教授の生首が木に吊り下げられていたの。この前にもそんな事件があったし、殺人、誘拐などアメリカよりも酷いわ」
　知らなかった。スーザンの話を聞くまでネパールと言えばカトマンズ。カトマンズと言えばヒマラヤ山脈。ヒマラヤ山脈と言えばエベレスト。そのエベレストを眼前に見上げる標高三千九百メートルに在る、アメリカのロスアンゼルスの羅府新報で読んだことのある、日本人登山家宮原魏（たかし）氏が建てた“ホテル・エベレスト・ビュー”と壮大な自然だけがネパールの印象だった。この壮大な自然の麓で繰り広げられている政治形態、民族主義の悲愴な争い事に平和も平穏もない日常があった。
　二度目の渡米で永住権獲得を決意して働き始めた頃の一九八〇年前後には、あちこちにベトナムからの避難民が多くいた。アメリカ支援の南ベトナムが共産主義支援の北ベトナムに陥落してからも、共産主義に馴染めない南に住むベトナム人の脱ベトナムが続いていた。彼らは世界中に散っていった。十人も乗れば一杯の船に二十人も三十人も乗ったり、その費用を払えない女性は強姦されたり、男は海に突き落とされたり、ほとんどの避難民が命をかけてベトナムを脱国してきた、と知り合いは云う。出国するために金を払っても、生きるか死ぬかの境遇を経て他国に逃れてきた、それが避難民なのだ。世の中には金を払っても安全も平穏の保障もないことが多々ある。
　今現在一緒に仕事をしている仲間の一人に、ミャンマーからアメリカに永住してきている三十七才の男性がいる。
自分が日本人とわかると、だれよりも親しみを込めて話しかけてきた。日本は豊かだ。日本人は頭がいい。日本人は信頼できる。チョングと言う朝鮮人みたいな名前だけど、カチン族を名乗る正真正銘のこのミャンマー人はビルマ人だとも言う。ミャンマーと云う自分の国を語るチョングの心は熱い。国民の九十パーセントが仏教徒のミャンマーにイスラム教徒、キリスト教徒、その他の宗教がある。因みにチョングはキリスト教徒である。「知ってるか。中国人や中国政府を・・・。少しの金をミャンマー政府に払ったら、自分たちが住む北部に来て、木という木は全部切り倒して持ち去るし、金を採掘するためにあちこち無茶苦茶掘り返し、ほったらかし放題だ。中国人と云うのは自分のことだけで、人のことなんか考えない人種だぜ」。中国は発展途上国援助を名目にアジアやアフリカの後進国に金をばら撒き、自国の経済発展に必要な地下資源

やあらゆる資源の取引を交渉してくる。政府間で交渉が成立すると、権利を落札した会社が中国人労働者を引き連れて乗り込んでくる。この中国人労働者には共産主義の倫理観念と社会通念しかないために、相手国の習慣や人間性を尊重する道徳を爪の垢ほども持ち合わせていない。だから彼ら中国人は自分たちのやり方でやりたい放題したい放題で、相手国の人々の心を傷

つけ踏みにじってもそれが分からないのである。

世界は平和ではない。

　世界は平和ではない。
第十五期自衛隊生徒として、十五才の時、海上自衛隊少年術科学校の江田島に入校した頃からそう確信していた。平和と云う言葉は大変貴い意味を持ち、全人類の願いでもある。我々日本人は第二次世界大戦が終わってから今日まで、平和と云う言葉を使い、政治、社会情勢、又は国際情勢の中で、平和に近い日々を過ごしてきた。しかし果たして、それが平和と云える本物の平和であっただろうか。それは大いに怪しい。ただアメリカとの日米安全保障条約に守られて、戦争や紛争に巻き込まれることがなかっただけのことではないか。
　日本人は平和を勘違いしている。世界には百九十五（二〇一一年七月九日現在）の国々がある。そのほとんどの国には、日々の市民生活を守る警察がある。そして、外敵から領土、領海、領空を守る軍隊がいる。昭和三十年以後の昭和の日本ではそんなに身に感じる危険は多くなかったが、最近（二〇一〇年前後）の日本はアメリカに劣らないほど物騒で、命に関する尊さと重大さが劣化したような事件が多発している。こんな時世に、身に危険を感じる一般市民が警察に保護を訴えても無視されたらどういう事になるかは、以前よりも痛切に理解できると思う。しかし野蛮な隣国がある日突然、“あの島は歴史的にも領土的にもオレの国の島だ”と攻めて来たら、あなたはどうするだろうか。国と国の戦争や紛争で負けるとどう云うことになるか、考えたことがあるだろうか。
　一九九〇年八月二日午前二時。石油の利害関係からサダム・フセインのイラク軍が、突然クェートに侵攻した出来事は世界の人々の記憶に新しいところである。
　第二次世界大戦で日本は敗北した。そして東京裁判で日本軍の首謀者たちは処刑されたが、天皇陛下にしても日本国民にしてもそんなにひどい処遇は受けなかった。それは米国が先頭に立って日本の敗戦処理をしたからである。もしもこれがソビエトや中国の指導でやられていたら、日本と云う国も民族も無茶苦茶に叩き潰されていただろう。ソ連は日本男子の殆んどをシベリヤ開発に奴隷のごとく放り込んだだろうし、中国も日本人の家から根こそぎ財産を強奪し、婦女子は幼児から老人まで性奴隷となっていたかもしれない。それは一九四五年八月十五日の無条件降伏を受け入れた天皇陛下の玉音放送以後、全日本軍が武装解除した後の中国、満州で起きた無防備（全ての武器を捨て丸腰になった）の日本人の記録を読めばわかるはずである。韓国が従軍慰安婦と言って譲らない、本当はありもしない性奴隷の数の比ではない。又捏造された南京虐殺よりも多い日本人が、中国、ソ連軍の兵士により暴行、強姦、殺戮、強奪の行為を受けているのである。
　世界経済が発展して中国がGDPで日本を抜き世界第二位の経済大国となり、韓国も現代自動車やサムソンの電子会社に代表されるような経済発展国となった今、世界の勢力図は様変わりした。手段を選ばない領海侵犯や勝手な捏造や偽造による領土主張、他国の内政干渉をしながら自分勝手な歴史主張。こんな隣国に対して日本政府のやってることは、あまりにも手緩く間が抜けている。そうでなければ、外交の仕方、ケンカの仕方、駆け引きの仕方も知らない、国難という言葉も知らない人が政治をやっているのだろう。本当に日本はやばい。世界には毎日のように政治

、宗教、部族による戦争、紛争で死んでいる人がいるのに、平和だからとか、相手を刺激するからとか、話せばわかるとか、相手も人間だからとか、学校の倫理社会か道徳の教科書を読んでいるような言葉をならべている政治家や評論家もいる。日本には世界を知らない、頭だけが大きくなった大人が多い。いくら経済が発展しても、中国や

韓国、ロシアやベネズエラの大統領みたいな人を見ると、一目瞭然、世界は“弱肉強食”である。どうして日本の政治家はそれが理解できないのだろうか。完全に日本は中国、韓国から馬鹿にされているのである。日本の政治と政治家がこの程度であることを見抜いた上での策略なのかも知れない。韓国の李大統領は、はっきりと“日本の国力は落ちた”と、言っている。中国も韓国も日本を見下しているのである。

第二次世界大戦後、中国もアメリカもロシア（ソビエト）も幾多の戦争をしている。コミュニズムとデモクラシー。中国とロシア（ソビエト）は世界のコミュニズム化を目指し、アメリカはコミュニズム化し、共産党一党独裁政権となる国の国民から個人の権利を取り戻すために世界の戦争と紛争に介入してきた。それがいい方向に変わったこともあるし、泥沼に陥った時もある。この間、日本はひたすらに経済発展による国際貢献をはたしてきた。戦争を放棄し、自衛隊を国防のためだけとし、国内からも国外からも防衛費の干渉を受けながら切り詰め、隣国の韓国や中国が日本を標的に経済力と軍事力を蓄えて、その時期を窺っていたことも知らずに。この間、幸いにも日本と云う国はどこの国からも銃口を向けられることがなかった。そして、日本のマスコミや一部の知識層は平和という言葉と文字を氾濫させ、天国みたいな国、日本を喧伝していたように思う。

第二次世界大戦が終わってから六十七年。平和国日本は経済発展を遂げ、ゆとり教育を施し、失われた十年に見舞われたまま、隣国から領土をよこせ、と脅されている。これが平和の代償なのか。我われ日本人は、我われが日本人であることを自覚し、未だに世界中には一日たりとも平和な日がないことを肝に命じて、今日からの日本と日本人のために、そして世界のどこの国からも野蛮で理不尽な脅しや挑発にもうろたえることがないように備えていかなければならない。決して他国の従属国や属国とならないために。